



新しい自分に出会う場所

国際交流と自由な校風が生み出すものとは

1966年、「未来への夢をはぐくみ、その夢の実現をたくましく担っていく人」すなわち「世界を舞台に活躍でき、世界に信頼される人間」の育成を建学の趣旨とし、松信幹男とその姉である江守節子の手により創立された。

江守節子は自身が体験した留学生生活を生徒たちにも体験させたいと1969年よりアメリカ研修を開始。長きにわたる国際交流の歴史から「海外に興味のある人が多いですよ」と生徒たち。教師は「生徒たちは、世界には自分と違う考え方や文化があって当たり前だと感じているようです」と話す。



村岡真侑さん(高2)



北米研修



「ドルがまだ360円だったころ。そんな時代に、山手学院は高校2年生全員が参加するアメリカ研修をスタートさせた。現在では、訪問先にカナダを加え、北米研修と改称し、2人1組で2週間のホームステイを行っている。また、このプログラムの最大の特徴が相互訪問。リターンビジットとして、訪問先の生徒を迎え、山手生の家庭がホストファミリーとして受け入れている。」

自らの足で立ってみる。そこから見えるものとは

「とにかく行ってみる、見くみる、聞いてみる、ですよ」

この北米研修において、生徒たちに何を学んでほしいか。そう尋ねると国際交流部長の岡部幸一教諭からこんな答えが返ってきた。「今はネット社会なので、外国の文化が日本にいながらにして、とても身近に感じられます。ですが、実際に自分の両足で向こうの大地を踏んで、現地の人と接して、自分の目で見て、耳で聞く。これが一番大切なことです。だから、何を学ぶかは人それぞれかもしれない。現地では、ホストファミリーの事情によりプログラムは若干異なるが、共通事項は、週末はホストファミリーと一緒に過ごすことと現地の方に日本文化を紹介するイベント「カルチャーデー」を開催すること。私はホストに同世代の子ともいなかったもので、午前中はインターナショナルスクールでカナダの文化を学び、午後は遠足としていろいろな場所に行きました。1日だけ現地校に行きました。こう話すのは、カナダのビクトリアでホームステイした村岡真侑さん。行く前は、現地の方との触れ合いが楽しみで、自主的に英会話の本を読んでいたのですが、もう少し英語が話せればよかったという後悔があったので、周りの内進生の子たちも「北米研修では、もっとしゃべりたい」と言っていました。他に準備に時間を費やしたのは、カルチャーデーの出し物。私は法被を着てソーラン節を踊ること

に。他の班は、書道の体験、浴衣の着付けなど。私たち生徒が予算組みもした企画書を作って先生に提出。準備から運営まで、全部自分たちでやりました。その過程で日本の文化を振り返ることもできましたし、実際に向こうで披露したこと海外との違い、自分たちの文化の特徴や良さを知ることができました」

ホストファミリーとはすぐに打ち解けられたのだろうか? 「最初は話しかけるのに気後れしてしまっただけですけど、ペアの子が積極的に話しかけているのを見て私も仲良くなりたいたいがんばりました。ペアの子と一緒に歌を披露したら、グッと距離が縮まりました。3日も経つと英語が聞き取れるようになって、耳が慣れてきたなと思ったら、少しずつ伝えられるようになって、英語を話せることの喜び、楽しさを感じました。カナダは移民が多く、ホストもインド系でした。一緒にインド映画を見たり、民族衣装のサリーをプレゼントしてもらったり。一度に2つの文化を体験することができて、ちょっとお得でした(笑)。家族だんらの時間が一番楽しかったなあ。帰国後もメールのやり取りをしているという。」

自分が思えば、何だってできる

村岡さんに山手学院に入って良かった点を聞いてみた。やっぱり海外の体験ですね。それから、自由な校風。行事や部活など、いろいろやらせてもらえるので自分が思っているようなことができる。だから、いろいろなアイデアを思いつくようになりました。山手は新しい自分の一面を見つけれられるような学校。今日のお昼も昔の写真を見ながら、そんな話を友達としていたんですよ。それから、先日の個人面談の際に担任に、将来は法曹界を目指したいと話したら、「同じことを言っている人が他にもいる。裁判の傍聴に行くか?」と連れていってくれたんです。先生方は本当に親身になってくれます」

「自由というのは自分の責任において、考え、行動するという意味(岡部教諭)。生徒を信じ、任せる度量と細やかにサポートする繊細さ。この環境で学べるのがうらやましくも思う。」

